

氏 名	白 石 廣 子
学位(専攻分野)	博士 (歴史学)
学 位 記 番 号	博史甲 第18号
学位授与の日付	2022年 3 月26日
学位授与の要件	学位規則 (昭和28年 4 月 1 日文部省令第 9 号) 第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	バタヴィア移住日本人「ジャガタラお春」の研究 —17世紀、グローバルな場に生きた日本人女性の生活—
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 飯 島 渉 副 査 教 授 岩 田 みゆき 副 査 教 授 二 宮 文 子 副 査 東洋大学教授 岩 下 哲 典

論 文 の 内 容 の 要 旨

白 石 廣 子

一六世紀半ばに伝来したキリスト教は、豊後・京都・長崎などで活動の拠点を確立し、一五八〇年代には長崎を教会領とするまでに拮がりを示していた。貿易船で渡来したヨーロッパ人が、長崎市中に雑居して多数のヨーロッパ人を父とする子女も誕生していた。そうした状況の下、一五八一年（天正九）当時、長崎と下地区（有馬・大村・平戸・天草・五島・志岐の地区）におけるキリスト教信者は、一万五〇〇〇人に達し日本全体の信者の七六パーセントを占めるに至った¹。一五八七年（天正一五）に九州を平定した豊臣秀吉が長崎の実状を知ったことも遠因となり、「伴天連追放令」といわれる五ヵ条の定を出した。この定がキリスト教禁圧の始まりとされている。江戸幕藩体制が確立されるに従い秀吉の禁教政策を踏襲し、段階的に禁教令は強化された。豊臣秀吉、徳川家康と引き継がれた禁教政策は、伝統的宗教を破壊するという恐れにも増して、政権を脅かすスペイン・ポルトガルによる布教、貿易、征服という世

¹ 清水紘一『キリシタン禁制史』（教育社、一九八一年）三六頁。

界戦略に対する拒否への宣告であったという論説がある²。幕府は禁教の過程で、ポルトガルやスペインを、カソリック国（旧教、南蛮人）として弾圧の対象とし、一六三六年（寛永一三）、南蛮人系の男女及び小児の計二百八十七名をポルトガル領マカオへ追放することに着手した。

そして、一六三七年（寛永一四）に勃発し翌年に収束した島原の乱以後、幕府はキリシタン禁制を強化し、これまで比較的寛容であったプロテスタント（新教国、紅毛人）、及び中国人に対しても、更なる禁教への規制を期した。幕府はオランダ人やイギリス人男性、妻の日本人女性、その間に生まれた子供をバタヴィア（ジャガタラ、咬（カ）啗（ル）吧（パ）ともいう。現インドネシア共和国ジャカルタ）に追放するよう長崎奉行に厳命した。一六三九年（寛永一六）一〇月三十一日、総計三人（内メーテル・マルテンを父親とする小児二人は台湾に留め置かれた）が、平戸に集められバタヴィアに向けオランダ船・ブレダ号で出航した。この中に当時一五才の「はる」という娘がいた。「はる」は、亡イタリア人（旧教国、スペイン、ポルトガルと同類）を父とするが、日本人の母親が、イギリス人女房と長崎奉行所に届けたために、一家はマカオではなくバタヴィア行になった経緯がある³。

長崎の天文地理学者として活躍した西川如見は、この「はる」という少女が追放されて三年後に日本に届いたとされる手紙を「じゃがたら文」として、一七一九年に『長崎夜話艸』の中で紹介した。但し、西川如見による「じゃがたら文」は、創作であろうとの学者の見解が、江戸時代から述べられていた⁴。本論文でその真偽を検証し、如見の偽作であろうことを論証した。この「じゃがたら文」の中で語られた「はる」像は、如見の会得した地理・天文学の集大成としての思想に彩られたものである。「はる」は日本から遠く隔たった想像を絶する夷の国に追放された、可哀そうな女性の流伝として語り継がれてきた。それはこの如見による「じゃがたら文」に負うところが大きい。可哀そうな「はる」像は、何故日本人の同情を生み語り継がれてきたのか。当時の社会に流れていた思想と如見の日本神国観が大いに影響していたと考える。即ち如見は西洋天文地理学からヒントを得て、日本の地勢的位置から日本は神国である

² 平川新「前近代の外交と国家—国家の役割を考える—」（荒武賢一朗、太田光俊、木下光生編『日本史学のフロンティア』法政大学出版会、二〇一五年、一五八頁）。

³ 「黒船御停止其後切支丹御制戒南蛮種子并阿蘭陀エケレス種子之者迨異国御追放之事」（『長崎拾芥記』九州大学松本文庫蔵〔同写長崎歴史文化博物館蔵一八八四年〕）に長崎から追放された十一人の名前が記されている。その中にイギリス女房の母親と「はる歳拾五」の記載ある。

⁴ 森島中良「シンモンズ後家阿春文」（『海外異聞卷三』一七八九年（寛政元年）編）、穂久禰文庫（愛知県豊川市）所蔵、及び国立公文書館内閣文庫所蔵による。

との発見をし、それまでの秀吉・家康の神国観に論理的根拠を与えようとした。加えて中国の「華夷変態」によって、中国の地位が落ちたことによる日本の地位上昇を確信した。時代は科学的普遍性を求めながら、日本固有の思想や精神に立ち返ろうとする国学勃興の機運もあった。如見はそうした機運と朱子学的思考の中で「じゃがたら文」を創作した。こうした思想が対外観にも反映し、如見はバタヴィア（ジャガタラ）を「四季大熱國也、四時の序、唐日本と相反せり・・・人物甚賤く色黒し。常に裸也」と記し、日本や中国とは違い四季がなく常に暑く、住んでいる人間も賤しい（貧しい）と述べている。気候についてはまさしく正しい評価であるが、当時のバタヴィア社会を正當に理解していたとは言い難い。

果たしてバタヴィアの現実はどうであったか。バタヴィアはオランダ本国に似せた近代都市であり、現ジャカルタ湾に面した一画に、一七世紀初頭オランダ連合東インド会社 Vereenighde Oost Indische Compagnie（以下VOC）が、バタヴィア城及び南北に渡るヨーロッパ風の市街地を建造し、交易の為のアジア統括本部を置き、商業都市に特化した街として繁栄していた。統治はバタヴィア総督府政庁に委ねられていた。多様な文化と民族で構成された特殊な場で、グローバリゼーションの風にいち早く触れた「はる」は、如見が創作したような悲劇の女性だったのか。

アンソニー・リード Anthony Reid や、ジーン・ゲルマン Jean Gelman Taylor が指摘するように、前近代からジャワや周辺国の女性達が、自ら商取引に参加し自立していた⁵。

更にヨーロッパ人を父とするアジア系女性が、重要な働きをしていた。加えて弘末雅士は、少数のヨーロッパ人とアジア島嶼出身者、中国人など多様な住民からなるバタヴィア社会において、女性が社会統合の役割を担っていたと述べている⁶。

バタヴィアは小さなヨーロッパであり、ヨーロッパを知らないアジア系の人達がヨーロッパと類似の住居や服装で生活をしていた。その空間はオランダ人が自国と同様の文化を齎し、法律、訴訟に於いても本国に倣って取り決められ、出自はどの国であったとしても、全てオランダ本国の法律の枠内に規定された、しかし、社会構造的に人口の少ないオランダ人は、中国人を含むアジア系人々に、街の運営を依存せざる

⁵ Anthony Reid Southeast Asia in the Age of Commerce, 1450-1680: Volume 1 The Lands below the Winds, New Haven and London: Yale University Press, 1988.

Jean Gelman Taylor, The social world of Batavia: European and Eurasian in Dutch Asia, University of Wisconsin Press (Madison, WI) 1983.

⁶ 弘末雅士『東南アジアの港市世界』（岩波書店、二〇〇四年）六〇頁。

を得ない現状でもあった。相互依存で成り立っていた街といえる。因みに一六三二年調査においてバタヴィアの総人口は、八〇六〇人である。VOC従業員は、家族を含めて一七三〇人、自由市民（VOC従業員ではないヨーロッパ人市民）は六三八人、日本人は一〇八人（奴隷二五人を含む）であり、マルダイケル（旧ポルトガル植民地のインドやムラカ地方から流入した元奴隷身分でキリスト教に改宗した人、未だ奴隷身分も含む）が六四九人、その他奴隷、二五四五人（マカッサル、バリ島出身者が多数）、中国人移民（華人）は、二三九〇人と住民集団の中では一番の多数を誇っていた⁷。奴隷を除いた日本人八三人の内訳は、一六〇九年（慶長一四）、日蘭通交貿易開始以前に集団での契約移民、もしくは個人で移住した者、傭兵や使用人としてVOCに雇われ、その後解雇され自由の身分となった者、或は種々の経路を使って朱印船の渡航先である呂（ル）宋（ソン）、交趾（コウチ）、柬埔寨（カンボジア）、暹（シャ）羅（ム）などの移住先からジャガタラ（バタヴィア）にやってきた日本人男女⁸、更に、一六二四年（寛永元）に平戸から五人⁹、一六四二年（寛永一九）には台湾から四人¹⁰の日本人女性が、バタヴィアに到着したとの記録もあり、多様な事例が確認される。「はる」達がバタヴィアに身を置いた頃、そこは圧倒的に女性の数が少なく、女性が異文化交流の担い手として活躍できる環境下にあった。ヨーロッパ人を父とする女性達は、VOCの商務員と結婚する機会に恵まれていた。移住日本人女性も例にもれず、多くがVOC職員の妻となった。夫と死別すると、より良い条件で再婚するか、夫の遺産で経済活動をするという女性も多数存在していた。「はる」はシモンスというVOC商務員と結婚し、八～九人の子供を産んでいる。奴隷といわれた多くの家事労働者を抱え、若い頃はそれなりに家庭で多忙な日を過ごしたとみえる。「はる」が日本貿易などの経済活動に従事していくのは、夫が亡くなって以後のことと思われる。五〇才を過ぎて、「はる」は日蘭貿易への苦情をバタヴィア総督の代筆として日本語仮名書文書「そじやう」を認めた。本論において「はる」が書いたことを立証し、内容を吟味した。この書状は幕府の定めた「貨物市法」という貿易法への不満、加えてオランダ人に対する通詞の態度への不満などが書かれ、当時の日蘭貿易における問題点を浮き彫りにしている。

⁷ 岩生成一、前掲書『続南洋日本人町の研究』、二七一―二八頁。

⁸ 岩生成一「バタヴィア移住日本人の活動」（『史學雑誌』四六―一二東京史学会、一九三五年、三―一七頁）参照。

⁹ 村上直次郎訳『バタヴィア城日誌』1（東洋文庫、一九七二年）五四―五頁。

¹⁰ 同右、『バタヴィア城日記』2、一八四頁。

一方「はる」のバタヴィアでの生活は、そうしたVOCへの協力と共に、バタヴィアの孤児財産管理局へ娘名義の多額の貯金利子を請求する委任状を提出し、亡くなる前年に不動産売買の委任状に日本語でサインをしている。遺言状も数通あって、たった一人生き残った娘に遺贈している。史料から、バタヴィアでの生活は困難を伴いながらも、裕福な生活を営んでいたことが判る。そしてその裕福さは、高価な品を日本の親戚に贈り物として、届けていた手紙によっても窺える。

歴史の流れの中で移民として国を越えざるを得なかった「はる」を始めとする日本人女性達が、故国に手紙と共に贈り物を添えてバタヴィアから発信していた。手紙は如見の創作である「じゃがたら文」を除くと六通の「ジャガタラ文」が現在平戸の松浦資料館とオランダ商館において展示されている。本論では夫々について、詳細に検証した。その贈り物としてのモノは近世の人々の需要に添って、インド綿や中国絹製品であった。綿の産地はインドでも多岐に亘る地方からバタヴィアに集荷された。江戸幕府による自国産業育成のあおりで輸入品の制限があり、綿もその一つであった。即ち、高品質のインド綿への憧れは幕府高官のみでなく、庶民もまた渴望していた。彼女達の空間移動に伴って、その目や耳が選んで海を渡ったモノである。その移動にはオランダ船、唐船が使われた。つまり、幕府による正規の貿易品ではなく、バタヴィア移住者から届いた品々は、グローバル化した交易を利用した、日本人女性達の存在を反映していたといえよう。生活のため、女性達は地域に根差す必要があり、運搬手段を得るためにも異文化間交流に汗を流したと思われる。物理的に日本人の数が少なく、移住日本人達は他民族の中に混在せざるを得ない事情もあった。「はる」の娘と思われる「おきやら」が「はる」の死後に日本の親族へ手紙を書いているが、唐通事が翻訳した漢文書きであった。こうした事実からも「はる」は日本語を子孫に伝えていないことが判る。日本人移住民の唯一の心構えは、日本人としての属性に固執する必要も利点もない場で、多様な民族と文化を受け入れることであったと推測する。

前近代「はる」達のように移住民として異国に住んだ人達は、現在の歴史認識から言えば、どういう存在として捉えればいいのか。一七世紀、朱印船貿易関係者や雇用されて異国に根付いた人は多くいた。そういう人々の生活記録は、日本人としての日本史の中には登場しない。では根付いた国に残っているかと言えば、殆どそうした記録は残されていない。確かにこの地球世界に息づき、喜び悲しみ、苦しみ、悩みを抱えて生きていたのである。一国史の中で排除された人々が、異国でどのような生涯を送ったのか。そうした人々を掘り起こすことで、グローバル化の端緒と、日本の近世

の意味付けを確認できると考える。飯島渉は日本の「近世化」を「広域的な変動の衝撃を受け、独自の方法によって模索された動的な過程としての結果としての新しい秩序である」と岸本美緒の説を整理しながら述べている¹¹。広域的な変動の近世を体現する「はる」とバタヴィアの事象は、現在のグローバル化という状態を指すのかどうか、また日本語の意味するものと、本来の英語の意味するものとの違いもある。「はる」の環境と生活の実態を知り、我々の現在の立ち位置からの解釈によって、理解される事象でしかない。従って、以下のような議論を参考にグローバル化の概念を規定し

たい。羽田正はグローバル化について、国家やその国境や国民を当然視しない、国家の領域や国民といった要素を必ずしも意識しない、地球を一つの単位とし、世界各地の人々や場所がつながることを意味すると述べ¹²、一国史を超えて「地球市民」という概念を歴史学に反映させる必要性を説いている¹³。リン・ハントはグローバリゼーションとは、世界が相互に結合し、相互に依存していく過程だと述べ、相互依存を重要視している¹⁴。水島司は単なる地域比較に終わらず、異なる諸地域間の相互連関、相互の影響が重視されるという¹⁵。これらの議論に従えば、本論で対象にした「はる」は、「地球社会」の形成初期の時代に、グローバル化されたバタヴィアの街で、多様な人種と文化を受け入れながら、民族間の結合と相互依存の社会の中で生きた女性ということになる。

バタヴィアはVOCが作った小さなヨーロッパであり、実際のヨーロッパを知らないアジア系の人達が、ヨーロッパと類似の住居や服装で生活をしていた。その空間はオランダ人が自国と同様の文化を齎し、法律、訴訟に於いても本国に倣って取り決められ、出自はどの国であったとしても、全てオランダ本国の法律の枠内に規定された。社会構造的に少ない人口のオランダ人は、中国人を含むアジア系人々に、バタヴィア市の運営を依存せざるを得ない現状でもあった。民族の相互依存で成り立っていた街といえる。日本人移住民の唯一の心構えは、日本人としての属性に固執する必要も利点もない場で、多様な民族と文化を受け入れることであったと類推する。物理的に日本人の数が少なく、他民族の中に混在せざるを得ない事情もあった。「はる」を始め

¹¹ 飯島渉「『近世化』をめぐる諸問題」(『日本史学のフロンティア1』法政大学出版局、二〇一五年、一二七頁)。

¹² 羽田正『グローバル化と世界史』(東京大学出版会、二〇一八年)二〇一二頁。

¹³ 羽田正『新しい世界史へー地球市民のための構想』(岩波書店、二〇一一年)。

¹⁴ リン・ハント、長谷川貴彦訳『グローバル時代の歴史学』(岩波書店、二〇一六年)五六頁。

¹⁵ 水島司『グローバルヒストリー入門』(山川出版社、二〇一〇年)一一四頁。

とするバタヴィア移住日本人は、現地社会を受け入れ同化することが自己の存在の証であつたと考える。「はる」の娘と思われる「おきやら」が「はる」の死後に日本の親族へ手紙を書いているが、既述のように唐通事が翻訳したと思われ、漢文書きであつた。こうした事実からも「はる」は日本語を子孫に伝えていないことが判る。V O Cに残されている遺言状など公文書は勿論オランダ語である。即ち、移住日本人はある程度の漢語とオランダ語の理解が、生活上必須だつたと考えられる。当時外国という定義は「礼儀と文字」を同じくする国であり¹⁶、中国近辺の国を意味していた。バタヴィアは外夷に当たり、横文字の国として「礼儀と文字」を異にする国と日本では捉えられていた。

とはいえ、事実として華人の人口が多く、殊に日本人と華人の付き合いは他の民族に比べて遙かに多く、日本人居住者は他の中国沿岸湾市同様、礼儀と文字を同じくする国との認識の中で生活していたと考える。また、日本語の読み書きに優れた「はる」は稀有な存在として、バタヴィア総督から重宝されていたと思える。「はる」は当然総督と意思疎通を計れるほどに、オランダ語の理解ができていたはずである。「はる」がいなければ、「そじやう」という総督の日本貿易に対する苦情文書も作成できず、史料として残存しなかった。

バタヴィアは一七世紀の終わりに都市も整備され市が立ち、オランダ本国と遜色ない華麗な姿に成長していた。「はる」達日本人移住者はその繁栄の時代と共にあつた。しかし、一八世紀を迎える頃に、過度の砂糖生産の為に、森林伐採と運河汚染を生み、ヨーロッパ系の人々が都市を離れ、郊外に転居せざるを得ない事態が起こる。その一八世紀を、「はる」は幸いにも経験していない。桃木至朗は大航海時代の帰結としての一七世紀後半にみる経済活動の停滞の原因が、限界まで進んだ農業開発や森林伐採による環境破壊と、世界の広範囲で行われた戦乱と革命だという¹⁷。環境破壊はバタヴィアに限らず、当時世界にみられた現象であつた。一八世紀後半に、イギリス東インド会社のインド支配、オランダ本国とイギリスの戦争で、V O Cは次第に力が衰えていった。とはいえ、V O Cは一七九九年に解散するまで、ともかくバタヴィアを維持し、約二世紀に亘り南東シナ海域の交易に君臨していた。環境破壊を含むバタヴィアは、グローバル化された商業社会の典型であり、現在の我々に通じる都市の姿を見

¹⁶ 塚本学、前掲論文「江戸時代における「夷」観念について」、九頁。

¹⁷ 桃木至朗「世界史教育、東南アジア史、グローバル・ヒストリー」（水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社、二〇〇八年、六三頁）。

せている。そして、「はる」はその社会の最も輝かしい時代に生きたのである。つまり「はる」は国家や国民という意識のない場所で、日本人でもなく、オランダ人でもなく、「地球市民」として七二才まで永らえた。勿論、「はる」は自分が「地球市民」であるという考えもなければ、グローバル化した世界に生きているという感覚もなかったはずである。

以上のように「はる」は、日本の「近世化」と「鎖国」政策に運命を翻弄されて、グローバルな場に辿り着いた。日本人という属性に拘らず、一国史の垣根を超えて異国に根付いた生活者として存在していたのである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は「ジャガタラお春」として知られている、バタヴィアに流された日本人女性「はる」の実像と伝説を考証し、「はる」のバタヴィア社会での活動や生活を再検討したものである。

1639年、長崎生れの「はる」(イタリア人を父親とする)は、キリスト教禁教政策(いわゆる「鎖国」)によって、日本人の母親、姉、姉の子供と共にバタヴィアに流された。西川如見が「はる」が書いたとする手紙を、『長崎夜話艸』の中で「じゃがたら文」として紹介したことによって(1719年)、この手紙は国を追い出された少女が故国を思っ悲しみにくれる有様を書いたと解釈されることとなっ、「はる」を悲劇の主人公とする伝説が昭和初期まで語り継がれた。しかし、「はる」の手紙は西川如見の偽作ではないかという疑いが一貫してあり、本論文はこの点に関しても考察を行った。

序論で課題の設定と先行研究の整理を行った後、第1章では、主として「ジャガタラ文」の史料考証を行った。現在残っている手紙は6通であり、その内の3通は「はる」によって書かれたことを確認するとともに、「シンモンス後家」と表記された手紙から、「はる」がシンモンスと結婚し、唐船やオランダ船を利用して、贈物等のやりとりをしていたことを論じた。

第2章では、西川如見が『長崎夜話艸』「じゃがたら文」の中で、何故「はる」を悲劇の女性として描いたのかを考察した。西川は、神国である世界一の恵まれた日本から、「邪教」を信じ、外夷と位置づけられる国に追い出された「はる」を悲劇の女性として描いた。本論文は、西川が実際には17世紀初頭に刊行された『将軍記』所収の「肥前龍造寺が臣瀬川采女正妻の文」に倣って、実際の「ジャガタラ文」をちりばめつつ創作したことを明らかにした。

第3章では、主にバタヴィア（ジャガタラ）の歴史とVOC（オランダ東インド会社）の経済活動における移住日本人女性達の役割を検証した。当時の家の図面から、その生活の様相も明らかになった。移住当初から、「はる」の交際範囲は平戸商館に勤務していた経験のあるオランダ人たちにも広がっていた。また、日本人女性の多くはVOCの上級職員と結婚し、資産を形成したことをその遺言状から明らかにした。

第4章では、現ジャカルタのインドネシア国立文書館で蒐集した2点のオランダ語古文書を翻字・翻訳し、その紹介を試みた。それは、1681年の孤児財産管理局に貯金の利子を請求する委任状と「はる」が亡くなる1年前に自身の不動産を孤児財産管理局委員に売るための委任状である。「はる」の夫となったシンモンズはこの機構の委員を経験し、VOCと日本人達を仲介する役目を果たしていた。「はる」も夫の存在によってVOCとの関係を深めた。

第5章ではバタヴィア総督から長崎奉行に出された貿易への2通の苦情処理のための文書（1642年の「訴状」と1675年「そじやう」）を分析した。どちらも日本語で書かれたオランダ国立公文書館所蔵史料の「そじやう」は、「はる」が日本語を代筆したものであった。1672年の貿易法改正によって、大きく利益が低下する中で、1675年「そじやう」は貿易品を減らし、或いは日本撤退を匂わせ威嚇している。「はる」はオランダ総督の言い分を日本語にし、日蘭貿易への媒介役を引き受けたといえる。

結論では、以上の研究をふまえ、バタヴィアに移住を余儀なくされた「はる」という女性は、故国を思う悲劇の女性だったのではなく、日本人としての出自を超えて、国家の垣根を超え、異国でさまざまな活動を行ったことを確認した。

本論文は、きわめて限定的な史料しか存在していない「はる」の虚像と実像に関して、先行研究をていねいに整理した上で、既存の史料に関する考証を再度行うとともに、新たな史料の発掘を行い、その実像に迫ったものと判断できる。特に、17世紀の東アジアや東南アジアという、日本や中国、ヨーロッパ勢力が複雑に交錯する地域において、数奇な運命をたどりながらも、広い人脈や豊富な経験を活かしながら、さかんに活動を行った「はる」という女性の姿を再構成することに成功している。この結果、西川如見の解釈によって一般化した「はる」をめぐる人物像を転換させることに成功しており、本論文の目的は十分に達成され、学問的な貢献を行ったと見ることが出来る。

先行研究の把握は羅列的な印象もあるが、これまで述べてきたように、史資料の発掘や再解釈、さらに歴史像の再構成という意味で博士学位論文としての要件を十分に

満たすものといえる。

なお、審査委員からはいくつかの問題点や今後の課題も指摘された。叙述において用語の不統一が目立ち、今後、修正されるべきこと。事実関係の再解釈から、日本の近世史や、オランダを中心とする交易史、また、海域アジア史の研究に対してどのような新たな視点を提示するのかが論じ切れていないなどの点も指摘された。例えば、筆者はそれをグローバルという用語によって説明を試みているが、グローバルヒストリーとして提起されている論点の機械的な応用のきらいがある。但し、以上の課題は、理論的な要素を強く含み、学術論文への再構成などの作業の中で達成されるべき課題である。

学位論文の要件に関係して、本論文の一部は、すでに、査読付き学会誌への掲載が決定している一点の研究論文を含め、複数の論文として公表されている研究成果を基礎としていることを付言しておきたい。

以上述べた点から、審査委員一同は白石廣子氏の論文が博士の学位を授与されるにふさわしいものと判定する。